

成都期の杜詩と庾信文學

加藤 國安

序

成都にて初めて草堂を持つことができた杜甫は、當初陶淵明や謝靈運的な世界を強く志向し、自身一農民となり、酒を飲み、自然や友人と親しむのを喜びとし、また山水の中に真なる境地を探索しようとした。陶謝との關連はすでにある程度論じられているが、このほか成都期の作品を見るに、北周の詩人庾信への強い共感も少なからず見られる。たとえば庾信に直接言及した句としては、「庾信文章老いて更に成り 凌雲の健筆意縱橫」(戲爲六絕句)、「庾信哀しむこと久しと雖も 周顛好みて忘れず」(上兜率寺)の表現がある。そこで小論では、以前より瀟洒な感覺の詩や戰亂詩・「關塞詩」等において、庾信文學に種々のことを學んだと思われる杜甫が、成都期において新たに何を受容・發展させたかについて考察を加えてみたい。

この問題を具體的に論ずるには、兩者の作品を比較検討し、表現上の特質・類示を明らかにし、密接な關連を把握することより始めねばならない。その上で杜甫の庾信への共感の背景や、兩者の表現上の類似・差異の持つ意味等について考えてみたい。

杜甫が草堂を營もうとしたのは、成都が最初ではない。すでに秦州にて幾度か土地を選んでいる。しかし、結局秦州では草堂を得られず、秦州を去り、同谷にても再び草堂建設を考えたが果たさず、成都へと旅立つている。これからしても杜甫の草堂建設が、深く切實な願いだつたことが伺える。それだけに成都に居を構えるにあつては、入念な土地選びをしたことと思われる。では最初にその折の「卜居」詩から見よう。

無數蜻蜒齊上下 無數の蜻蜒は齊しく上下し

一雙鸚鵡對沈浮 一雙の鸚鵡は對いて沈浮す

これは『杜詩詳註』所引の、庾信「詠畫屏風詩二十四首」其二十四に學ぶであらう。

行雲數番過 行雲 數番過ぎ

白鶴一雙來 白鶴 一雙來たる

主な類似點を掲げれば、「無數」と「數番」が非限定的な數量。「蜻蜒」と「行雲」は空を行くものへの視點。「一雙」は共用され限定的な數量として前句と數目對をなす。「鸚鵡」は梁・簡文帝の「詠飛來鸚鵡」

詩に、「口には銜くはむ長生の葉 翅には染む昆明の苔」(『全梁詩』卷二)と歌われるように、「白鶴」とともに美しい仙鳥の對をなす。全體的には、嚴密な對句・整つた句法にて詠出する點も同様である。

右の一般的な指摘のほかに重要なものは、この句が庾信の數目對の技法を學んでいると思われる點である。私の見た限りでは、庾信には數目對による自然詠がかなり見られ、庾信以前及び同時期の主な詩人には、この種の表現はそう多くはなく、あつても庾信のように多彩なものはない。庾信は華麗な對句表現を多く残しているが、數目對は數的世界を並列する緊張と、數により對象を量の上で明確に示し確かな印象を讀者に與えんとする、一つの藝術的趣向として開拓されたものと思われ。たとえば庾信には次のような例が見られる。

- 驚心一雁落 心を驚かして 一雁落ち
連臂兩猿騰 臂を連ねて 兩猿騰る(北國射堂新成)
寒沙兩岸白 寒沙 兩岸白く
獵火一山紅 獵火 一山紅なり(上益州上柱國趙王二首 其二)
雲度三分近 雲度りて 三分近く
花飛一倍低 花飛びて 一倍低し(詠畫屏風詩二十四首 其十三)
右は數量を明示するが、中には不定數表現も散見する。
一郡催曙雞 一郡 曙を催す雞
數處驚眠鳥 數處 眠りを驚かす鳥(擬詠懷二十七首 其十九)
引泉恒數派 泉を引くこと 恒に數派
開巖即十重 巖を開くこと 即ち十重

(同會河陽公新造山池聊得寓目)

管見によれば、數目對による自然詠を巧みにこなせた詩人はそう多くはない。その中で庾信の數目對は適切でかつ美的調和があり、自然

をじつに印象的に捉えている。庾信の恵まれた文學的天分は六朝文學を網羅し、加えて様々な方面に可能な限り新鮮な境地を開いたが、この數目對の自然詠もその一つだといえよう。杜甫はおそらくこの點を鋭敏に感得し、自己の詩に採り入れたのであろう。

さて、杜詩の「無數」の蜻蜓・「一雙」の鷓鴣の數目は、各々の最も自然な状態を示そう。また、「齊しく上下し」「對いて沈浮す」は、各々の諧和を律動として表わす。いわばこの二句は神秘的な土地との交感をいう重要な部分で、このような自然に接したことが、居を構える地を決定する主因になつたと考えられるだけに、詩中最も事物の擬視とまた表現の創意を要した所かと思われる。この大事な場面で杜甫は庾信の詩句に學び、一層嚴密な對句表現に構成し、さらに自然の根底に流れる諧和をも律動感豊かに創出するなど、より深味のあるものに發展させているといえる。

- 次に、草堂の周圍に植える樹木を杜甫が所望した詩で、
奉乞桃栽一百根 乞い奉る 桃栽一百根
春前爲送浣花邨 春前爲に送れ 浣花邨
河陽縣裏雖無數 河陽縣裏 無數と雖も
濯錦江邊未滿園 濯錦江邊 未だ園に満たず(蕭八明府實處覓桃栽)
第三四句は庾信「枯樹賦」の、

若し金谷滿園の樹に非ざれば、即ち是れ一縣の花。
若非金谷滿園樹、即是河陽一縣花。

を意識しよう(『詳註』所引)。庾信の句は、晉・石崇が金谷園にたくさんの樹木を植え、また潘岳も河陽縣令のとき桃で縣内をいつばいにしたという有名な故事に基づく。ことに石崇などは、「李衡は則ち橘林千樹、石崇は則ち雜果萬株、並べて豪情の侈する所にして、儉志の嫺

しむ所に非ず」(沈約「郊居賦」『全梁文』卷二十五)と歌われた豪遊の人物であり、その宏大な別荘の趣きは一貧士の草堂とはおよそ不釣合である。實際にはこの原話からというよりも、不要な部分を捨て典雅な方向に展開した庾信の表現からの借用と思われる。庾信にはこの「金谷——河陽」表現が度々用いられており、右の「枯樹賦」の例なども次の「春賦」の、

新年の鳥聲千種に囀り、二月の楊花路に滿ちて飛ぶ。河陽一縣併べて是れ花、金谷從來滿園の樹。

新年鳥聲千種囀、二月楊花滿路飛。河陽一縣併是花、金谷從來滿園樹。

この部分を北遷後に榮枯盛衰の感慨をこめて言い改めたものである。さらに次のような表現も見られる。

枝繁類金谷 枝繁り 金谷に類し

花雜映河陽 花雜り 河陽に映ず(詠園花)

河陽古樹、金谷殘花。(周大將軍襄城公鄭偉墓誌銘)

これらの句を見ると、原話のような豪情の阿克を抜いて、華麗で清らかな園のイメージを強調しているように思われる。杜甫の「河陽——濯錦江邊」の園は規模はともかくとして、有名な花園と質的に美しさ清らかさを同一にし得るを願つての、庾信的な華美な世界の借景であろう。

また、本詩にて杜甫は「桃栽一百根」を所望しているが、この數は草堂の風景としていかなる意味を持つのであろうか。この表現には、おそらく庾信「小園賦」の「楸柳三兩行 梨桃百餘樹」が意識にあつたのではないか。この賦によれば庾信には數畝の粗末な廬があり、園内には梨と桃が百餘樹植えられ、「落葉は牀に半ばに 狂花は屋に滿

つ」という風景だつたらしい。これに對し陶淵明の廬は、「楸と柳は後の簷を蔭い 桃と李は堂の前に羅なる」(歸園田居)とあつて數など不明で、質朴な感じがする。杜甫は自己の體驗からして、戰亂により故郷から隔てられ異境の「小園」にて、退隱的生活を餘儀なくされた庾信への強い共感を抱いていたであろう。桃の木の數を百と明示することで庾信の「小園」に近づき得たかのように思われ、樹木が開花した折には小さいながらも華やかな風景を、杜甫は自己の草堂に夢想したのではあるまいか。

さて今日、成都の杜甫草堂内には、「花徑」という名の小道があるが、その名の由來は杜甫の「客至」詩の、「花徑曾つて客に緣りて掃わす 蓬門今始めて君が爲に開く」(花徑不曾緣客掃 蓬門今始爲君開)にもとづく。この「花徑」も庾信が好んだ詩語で、

狹石分花逕、 狹石 花逕を分かち

長橋映水門 長橋 水門に映ず(詠畫屏風詩二十四首 其四)

絶愛猿聲近 絶だ愛す 猿聲の近きを

惟憐花徑深 惟だ憐む 花徑の深きを(同 其八)

花徑日相携 花徑 日びに相携え

花林鳥未棲 花林 鳥未だ棲まず(奉和趙王)

また庾信の父庾肩吾にも、

向嶺分花徑、 嶺に向かいて 花徑分かれ

隨階轉藥欄 階に隨いて 藥欄轉ず(和竹齋『全梁詩』卷七)

とあり、この父子が貴族の風流な園遊を甚だ愛したことが知られる。庾信の「一徑(逕)」表現には、「菊徑」「春徑」「酒徑」「幽徑」「小徑」等様々な例があるが、「花徑」は庾父子に至り初めて見られるもののようにである。庾信の詩に、「併べて一園の花と作す」(奉和趙王美人春

目、「潤底 百重の花」(遊山)と歌われるように、庾信は梁朝最高の宮廷詩人らしく、百花繚亂の風景を最も香り高く詠じ得た人物で、こうした雰圍氣を華やかに放つ語として「花徑(逕)」を用いたのである。右の例のように北周の趙王にも、この「花徑」を披露するなどかなり氣に入つていたと思われ、庾信にふさわしい詩語だつたといえよう。この庾信の「花徑」に杜甫はかなり早くより着目しており、長安時代左氏の莊園に遊んだときに、その表現にまねて、「暗水花徑に流れ 春星草堂を帶ぶ」(夜宴左氏莊)と詠んだことがある。そして成都に至り、「花徑」の清新な感覺を愛し、また庾信への親しい思いから、堂内の小道の雅稱として用いたのだと考えられる。

以上、杜甫の草堂に關連する庾信の作品を取り上げ、検討を加えてきたが、このような杜甫の庾信への強い共感は何に由來するのだろうか。杜甫は成都に至る前、「成都萬事好ろしといえども 豈に吾が廬に歸るに若かんや」(五盤)という、結局故郷のわが家に勝るものではないとの強い思いを抱いていた。杜甫は郷里に心を残しながら、いわば他郷への異和感・不安感の中で居を構えるのであるが、その重苦しい空氣をどうにかして打ち拂う必要があつた。陶淵明・謝靈運の居(始寧の墅)は故郷に定められたもので、異郷に流寓する彼の場合とはかなり異質であり、むしろ杜甫の胸中には庾信への感慨が奥深く流れていたであろう。そこに杜甫の庾信への深い共感が芽生える理由があつたと考えられる。他郷に築く廬なればこそ、未知の空間への不安があり、土地の不淨を拂うためにも、入念な「卜居」と種々の準備が必要となつてくるのである。こうして前途への祈りの下に、庾信文學を自らの慰め・勵ましとなし、その重要な一面である明るく瀟洒な雰圍氣が草堂に移植され、「二百根」の桃が所望され、「花徑」が開かれた

ということではなかつたか。

ところで杜甫の「堂成」詩には、この草堂を傍人が間違つて揚雄の宅に比喩したと詠じている。「旁人錯比揚雄宅 懶惰無心作解嘲」。杜甫が内心、草堂を誰の居に比したかについて明言はないが、「庾信の宅」(送王十六判官)詩への密かな思いもあつたかと思われる。というのは、以上論じてきたことに加えて、杜甫は後年夔州にあつてしばしば「庾信の宅」に言及し、さらには、「庾信羅含俱に宅有り 春來秋去誰が家とか作る 短牆若しを在らば殘草に從せん 喬木如し存せば花を假る可けんや」(舍弟觀赴藍田取妻子到江陵)と、實際に「庾信の宅」を借りて住まんとする願望を述べているからである。杜甫は庾信の身近に身を置くことで、その生涯により深く思いを寄せ、またその文學を一層自己のものとして思われる。成都草堂はその具體的な實踐としての意味を、早くに帯びていたのではあるまいか。

二

草堂を築いた頃の杜甫は、世間的な價値觀を離れた所で自己を深く見つめ、あるがままに生きて行こうとする態度を強く示している。

江臯已仲春	江臯	已に仲春
花下復清晨	花下	復た清晨
仰面貪看鳥	仰面	貪りて鳥を看
回頭錯應人	回頭	錯りて人に應ず
讀書難字過	讀書	難字過ごし
對酒滿壺頻	對酒	滿壺頻りなり
近識峨嵋老	近ごろ識る	峨嵋の老
知余懶是真	余が懶	是れ真なるを知る(漫成二首 其二)

江潭での自由な振舞を並べ、最後に「懶」こそ自己の「眞」の姿なのだと締めくくり、この解放感と安らぎの中に、確固たる眞實との合一感を味わつてゐる。本詩の構成を見るに、眞中の兩聯は「懶」の種々相をなし、末尾で一連の言動がじつは「懶」の諸展開だつたと示されるのである。杜甫はこの自由な境地に、今後の草堂の生活への期待を寄せる。その意味で末尾の句は、表面の態度とは裏腹に深い内省による感慨だといえる。その感慨は最後の「知余」表現において、深い眞情として集約されることで、實に効果的に表わされていると思われ

る。この「知余」表現は杜甫の獨創ではなく、庾信に學ぶものであろう（『詳註』所引）。原詩を掲げれば、

歸軒下賓館 歸軒 賓館を下れ

送蓋出河堤 送蓋 河堤に出づ

酒正離杯促 酒正 離杯を促し

歌工別曲悽 歌工 別曲悽たり

林寒木皮厚 林寒く 木皮厚し

沙迴雁飛低 沙迴り 雁飛ぶこと低し

故人儻相訪 故人 儻し相訪え

知余已執珪 余の已に珪を執るを知らん（對宴齊使）

北齊の使者の歸國により自己の周に屈したことが世に知れ、自らも屈辱の思いが新たにされるの意である。この宴席上庾信の心を最も苦しめるのは、「忠梁と仕周」の矛盾であつた。「執珪」つまり仕周はかつての知人達には隠したい事だつたが、北齊の使者の口からいづれ世間に廣まることを思うと、庾信は煩悶の淵に追いやられて行く。そうした複雑な心情を作者は詩の窮まりまで抱えこみ、もはや猶豫のならぬ

所でやつと溜息のように吐き出す。この「知余」表現は作者の苦惱する内面を深く人々に訴える上ですぐれた技法だといえるが、ほかの詩人にはあまり例がなく、庾信獨特の表現の一つである。庾信にはこのほか、「彼の窮途の働きを催い、余の行路の難きを知る」（擬詠懷二十七首 其四）、「願わくは子朱鸞に著かば、余の玄菟に在るを知るべし」（別張洗馬樞）、「言を舊相識に寄さば、余の生きて關に入るを知らん」（反命河朔始入武州）等の「知余」表現があり、全て詩の末尾に用いられている。亡國後の免れようのない悲哀を、作者は最後の一句に收斂し、その悲哀の深さを際立たせている。それは遣り場のない憤懣を、どうかして詩の奥に封じ込めんとでもするかのような行爲として映じる。後に残るのは空しさばかりだが、それでも滾滾と湧いて止まぬ悲哀が胸に突き上げてくると、それはもう理屈ではない。そこには内面の嵐にもまれ、渦巻く感情のうねりをやつと詩を介して放出し、精神の危機を回避している生々しい現實が顔をのぞかせている。しかし反面、庾信の苦悶は舊來の様式美に墮した詩文學に新しい血を流し込み、唐詩の個性的な抒情詩の先驅けとなる、見のがすことのできない史的意義をもたらしたともいえる。唐詩という中國詩史上の隆盛を用意した要因は様々あるが、唐以前において從來の平板な集團的文學を、いち早く生氣ある個性的な方向におしやつた庾信の重要な働きを、僅かな「知余」表現を通して部分的ながら理解することができるのではあるまいか。杜甫は庾信における文學的意義をこのような表現にも鋭敏に把え、積極的に自己の詩に取り入れたものと思われる。

閑靜な草堂の日々にも少しずつ矛盾の兆しが現われてくるが、不安な兆候を孕む退隱的生活を、杜甫は全篇庾信詩に似せて詠出している。

涼氣曉蕭蕭 涼氣 曉に蕭蕭

江雲亂眼飄 江雲 眼を亂して飄える

風鳶藏近落 風鳶 近き落に藏れ

雨燕集深條 雨燕 深き條に集まる

黃綺終辭漢 黃綺 終に漢を辭し

巢由不見堯 巢由 堯を見ず

草堂樽酒在 草堂 樽酒在り

幸得過清朝 幸に清朝を過すを得

奉答賜酒鵝 庾信

雲光偏亂眼 雲光 偏えに眼を亂し

風聲特噤心 風聲 特に心を噤む

冷猿披雪嘯 冷猿 雪を披りて嘯き

寒魚抱凍沈 寒魚 凍を抱きて沈む

今朝一壺酒 今朝 一壺の酒

實是勝千金 實に是れ千金に勝る

負恩無以謝 恩に負き以て謝する無く

惟知就竹林 惟だ知る 竹林に就くを

兩者とも朝の陰鬱な風景に對し、酒を飲み隱棲への憧憬を歌う。とくに冒頭の「雲——亂眼」表現と、第二聯の小生物の對句表現の類似に、杜甫の庾信への意識が顯著である。ここでは後者の問題のみを検討することにする。

庾信は江南人ということもあつたが、流寓の身だつただけに北土の嚴しい寒冷はひどくこたえたらしく、そのことをしばしば詩に詠じている。今、他の對句の例を掲げれば、

饑噪空倉雀 饑え噪ぐ 空倉の雀

寒驚懶婦機 寒さに驚く 懶婦の機(和何儀同講竟述儀)

鳥寒棲不定 鳥寒く 棲むこと定まらず

池凝聚未流 池凝り 聚りて未だ流れず(就蒲州使君乞酒)

飢寒を恐れる小生物を通して自己の危い存在を、より根源的には時代の不安を投影しよう。このおのきを彼の怯懦に歸してしまふのは適

當ではない。むしろ人間社會に對する何か得體の知れぬ混沌の襲撃を感じ、それへの鋭敏な感得だと思われる。茫漠とした時代ほどその本

質を藝術的に象徴するのは容易であるまいが、庾信がすぐれるのは自己の内に時代の緊迫感を抱え、社會・自然との大きな連關の下に詩篇

に結晶化させたことにある。人間社會の中で道を見失つた者は、それ

まで以上に懸命に自然と深く對話することによつて、その危機的狀態

を回避せんとするものである。蟹阮がそうだつたし、陶謝もまたそう

だつた。庾信や杜甫の詩を讀むと自己の投影と思える小生物の描寫が

しばしば見られるが、それは彼等の自己凝視であると同時に、その果

てにあるべき道への歸還の模索でもあらう。たとえば庾信の、

竹動蟬爭散 竹動き 蟬争いて散り

蓮搖魚暫飛 蓮揺らぎ 魚暫く飛ぶ

(詠書屏風詩二十四首 其二十二)

における自然へのこまやかな視線を意識し、杜甫は、

啁雀爭枝墜 啁雀 争いて枝を墜ち

飛蟲滿院遊 飛虫 院に滿ちて遊ぶ(落日)

と歌う。庾信はここで「竹——蟬」「蓮——魚」の相互の關連の奥に、

天地宇宙の安らかな姿といつたものを把握している。杜甫はこの庾信

にならい、小生物の何事もないような平凡な様子に目を凝らし、その

奥に人間社會に移行すべき普遍性を抱えていると解される。庾信のこ

のような現象の背後にひそむ何物かに觸れんとする詩の在り方に、杜甫は高い藝術性を見出していたに相違ない。であればこそ「朝雨」詩において庾信の詩想に模して、雨風を恐れる鳥達を描き戦亂の世にのく自己や時代の相を重ね、庾信への同一化を通して彼への評價を具體的に示したのであろう。

庾信は自然界の現象の奥に道理を探り天界にまで及ぶが、しかし天の善意への信頼を突き崩す現實の世界を前にして、激しい動搖に見舞われる。代表作「哀江南賦」は作者の天界への絶望感を、

老幼を提挈し、關河に年を累ぬ。死生の契闊、天に問う可からず。提挈老幼、關河累年。死生契闊、不可問天。

と歌っている。天への懷疑に陥つた庾信は、彼自身をも見失う悲哀を味わわねばならなかつた。「哀江南賦」は歌う、「危苦の辭無からず、惟だ悲哀を以て主となす、……危慮逼迫し、暮齒に端憂す」と。天への嘆きはほかにもある。

天道或可問 天道 或いは問う可きも

微兮不忍言 微にして言うに忍びず（擬詠懷二十七首 其十二）

諒に天造は味味たり、生民の渾渾たるを嗟く。

諒天造兮味味、嗟生民兮渾渾。（小園賦）

人間世界のまことに傷ましい状態は、自然界の深奥部まで及んでいると感じられたのである。表現は異なるが成都期の杜詩にも天の意志への懷疑が見られる。

蒼天變化誰料得 蒼天變化 誰か料り得ん

萬事反覆何所無 萬事反覆 何の無き所ぞ（杜鵬行）

靜求元精理 靜かに求む 元精の理

浩蕩難倚頼 浩蕩 倚頼し難し（病柏）

成都期の杜詩と庾信文學

これらの詩篇は自己の苦惱を人間社會全體にまでおし擴げ、時に人民の苦しみを代わつて天に訴え、時に人間の傲りを省みるふうのものになつてゐる。このような社會に對する態度は、庾信の場合まだ奇麗に見ようとする心が足枷になつてはいるが、ともかくも誠意あるものとして感じられる。中國にあつては古來天道の是非を問うた者は少なくないが、杜甫は自己の感覺からして庾信のそれに最も深く魅かれたのではあるまいか。詩はその性質上、本質的には相互の感性が響きあつたときに、眞に深い共鳴が生まれ高い理解が得られるものだと考えられるが、庾信と杜甫の關係もこの部類に屬するであらう。これまで見てきた表現の類似も、じつは種々の事態に遭遇するたびに、杜甫の内に庾信との共鳴現象が起こり、結果として時代への鋭敏な反應やそれを詩歌に結晶化する方法等において、幾多の共通する面を生んだといふことだつたと思われる。

三〇一

成都以後湖南に客死するまで、杜詩の重要なモチーフとして望郷の思があるが、それを歌つた多數の作品中のあるものは、庾信文學の深い理解を通して初めて成つたものである。以下、この問題について検討してみたい。

故國猶兵馬 故國 猶お兵馬

他鄉亦鼓鼙 他鄉 亦た鼓鼙（出郭）

離亭非舊國 離亭 舊國に非ず

春色是他鄉 春色 是れ他鄉（江亭王園州）

右の杜詩は庾信の次の詩句を踏まえよう（『詳註』所引）。

誰言舊國人 誰か言わん 舊國の人の

到在他鄉別 到^て他郷に在りて別るるを

(和侃法師三絶 其三)

祖國を喪失した人間同士が、他郷にて別れをなすことの言いがたい悲しみを詠じたものである。さらに庾信の句の背後には、梁朝が夷狄の蹂躪を受け、夥しい生命と財産が損われ、擧句に敵國に連行されるという悲劇を管めさせられた江南人の慟哭や民族的痛苦の感情などが流れていよう。

もし一般的な「故郷」「他郷」の表現であれば、近くは初唐の王勃・駱賓王にも少なからず見られる。今、その例を掲げる餘裕がないが、彼等の望郷詩には故國喪失の歴史的事實はないし、またそれに伴う深刻な感慨も見られない。古くは晉・陸機に故國喪失による望郷の詩賦が幾篇か存するが、この場合には國內の興亡であつて異民族との國家的角逐ではない。したがつてその作品に民族的な悲哀感が入つてくる餘地はない。それに比して庾信の體験は、歴史の轉換期における國家的・民族的悲劇としての「故國喪失」だつた點に大きな特徴がある。庾信文學の重要な「郷關の思い」はそこから生まれている。ほぼ同様の歴史的狀況の下で、杜甫は庾信の望郷詩に多くを學ぶのであるが、ただ杜甫の場合は庾信の時と違い、國家が減んでしまつたわけではない。君主は代わつても唐王朝は依然存続している。したがつて嚴密に言えば、喪われた「祖國」を隆盛を極めた往事として代替し、その「喪失感」を受けていると考えられる。しかし杜甫は些細な點を捨象し、現在を庾信の時代と本質的に同様だと直観し、この視點の下に眼前の事態を一層深刻に受けとめ、深い内容と感情を詩に創出したのである。ここにも表面的現象より本質的なものへの鋭い感性を有した杜甫の、詩人としての資質の有様を見ることが出来る。

本章の冒頭に掲げた二例は、庾信表現を踏まえその上に新たな展開を加えたものである。初めの例は、通常は遮斷された地の「故國——他郷」が、瞬時に同質の世界に變じてしまつたことを嘆き、時間的にも空間的にも増々擴大する戦争への強い憤りを歌う。異郷を旅しながら、杜甫は至る所で「故國」の苦惱を見出し、二重に深まる「故國」の喪失感を、過ぎし日々への追憶によつて埋めて行くのである。次例は、舊國のものにあらずと否定文にて舊國への感情を高め、他郷の春と肯定文にてそれを素直に喜べぬ感情を示す。他郷の美しい春景への複雑な思いを、「是非」の意味を逆轉することにより印象づけようという趣向である。このように杜甫は斬新な感覺で、庾信の表現に厚味を増しているといえる。ちなみにこの庾信の表現に最も近いのは夔州期の詩になるが、

取醉他郷客 醉いを取る 他郷の客

相逢故國人 相逢う 故國の人(上白帝城二首 其一)

愁いを秘めた旅客の酔い、他郷での「故國人」との出會いを歌い、庾信における他郷の別離の悲しみを、杜甫は離散の下での出會いの悲しみに巧みに轉化し、その悲しみを際立たせているのである。

以上の例からも分かるように、杜甫と庾信の望郷詩は歴史的視點を有することが明白であるが、その内實を考えてみたい。侯景や安史の亂後の國土は日々軍馬に踏みじられ、人々の間には深刻な世界の崩壊感が浸透していたらう。すべての人々は自己を繋ぎ留めていた中心を失い、混亂の只中に放り出され、一つの時代が終つたという思いを深め、かわつて過去への郷愁を時代の相としてかき立てて行く。このような全般的な空氣の中で、異郷に顛沛の身を置く杜甫や庾信にとつて、故郷は山河に遠く隔てられた地であるばかりか、過去に向かつ

て次第に躓になつて行く美しい世界でもあり、狂おしいまでに回想されるのである。ここに己が愛情と情熱を傾注したものがもはや失われたという、世界の「對象喪失」感が生まれ、深い悲哀と憂愁に彩られた望郷詩が創造されてきたと考えられる。

三三二

ここでは、典故の上に庾信独自の視點が展開された表現に、杜甫が注目し學んだと思われる望郷詩三例を取り上げ、兩者の關連を探つてみよう。

漢南應老盡 漢南 應に老い盡くべし

霸上遠愁人 霸上 遠く人をして愁えしむ(柳邊)

「漢南」は漢州の南、即ち現在杜甫のいる成都の北の梓州を指す。この「漢南」には、庾信「枯樹賦」の次の表現が意識されている(『詳註』所引)。

昔年柳を種えしに、漢南に依依たり。今搖落するを見るに、江潭に悽愴たり。樹すら猶お此くの如し、人何を以てか堪えん。

昔年種柳、依依漢南、今看搖落、悽愴江潭。樹猶如此、人何以堪。

庾信の「漢南」は漢水の南、つまり故郷の江南をいう。この句は『世說新語』言語篇の桓温の故事をもとに、原話の柳の生長を「搖落」に、また桓温の赴任地を自己の故郷に變え、主を失つた柳の「搖落」を憐み、自身の一層の衰殘を慨嘆している。杜甫は庾信が「漢南——柳」に新たに盛り込んだこの意味に着目し、逆に「漢南」を他郷、「霸上」を故郷の對比として再構成し、かつて若々しかった柳(自己)も他郷にまたたくまに老い、遠い故郷を愁えんと表現するのである。兩詩人の老殘が異常な戦時下の辛苦によるものであることは言を俟たない。

杜甫はこの老殘表現をも、庾信に多く學んでいると思われる。

ついでながらここで他の老殘表現を一瞥してみると、

凍雨落流膠 凍雨 流膠を落とす

衝風奪佳氣 衝風 佳氣を奪う(杜甫 枯枿)

古槐時變火 古槐 時に火に變じ

枯楓乍落膠 枯楓 乍ち膠を落とす(庾信 園廡)

膠を落とす枯木は庾信自身の姿で、どこか鬼氣迫る感さえあるが、杜甫はこれを柔らげて用いている。

白水魚竿客 白水 魚竿の客

清秋鶴髮翁 清秋 鶴髮の翁(杜甫 潛閣奉皇嚴公二十韻)

噫、子老いぬ。鶴髮雞皮、蓬頭歷らな齒。

噫、子老矣。鶴髮雞皮、蓬頭歷らな齒。(庾信 竹杖賦)

「鶴髮」とは白髮の意で、梁の宮廷詩人の仲間で「老病」を連作しあつた中の李鏡遠の詩に、「鶴髮にて軒冕を辭し 船背にして葵菽を烹る」(八關齋夜賦四城門・第三東城門病『全梁詩』卷七 庾肩吾の部に所收)の先例がある。この詩では外観的な自然な老いを言うのに對し、庾信では憂いの深さを強調する語となつてゐる。これに比べ杜甫の「鶴髮」は、「落膠」同様庾信ほどの激越さを持たない。この背景には政變との關わり方の程度の違いがあろう。庾信が梁朝滅亡の引金となつた朱雀門敗走事件の責任者(建康をだつたのに對し、杜甫は歴史の轉換劇の當時者だつたわけではなく、その分だけ現實からの痛撃を免れる所があつたと思われ)。梁朝滅亡後の庾信は衝撃のあまり、その後の人生の希望も政治への意欲も失い、一種の退行的精神状態に陥つたと考えられる。愛情あるいは依存の對象を喪失すると、人間は時に悲しみのあまり身體的な生命力さえも衰退させてしまうことがあるが、「故國喪失」

後の庾信がまさにそうであつた。さらに庾信は北邊後も「忠梁と仕周」の矛盾に苦しみ、いつ終わるともされない精神的葛藤を續けねばならなかつた。庾信の異常な老殘には、過去から未來までの大半を闇に閉ざす苛酷な状況があつたのである。兩者のその後の現實への對應を比較するに、庾信が矛盾を乗り越えられないまま没しているのに對し、杜甫は以後無に歸するまで地上に理想の世界を探し求めて行く。いわば庾信は怨みを殘し國家を追つて沈み、杜甫は地上に残り消失した世界を、臘燭の火の如く試験の中で最後まで呼び戻そうとしたとでもいえようか。

次に二つめの例を見てみよう。

天畔登樓眼 天畔 樓に登るの眼

隨春入故園 隨春 故園に入る

戰場今始定 戰場 今始めて定まり

移柳更能存 移柳 更に能く存せんや (春日梓州登樓二首 其二)

この「移柳」は庾信「哀江南賦」序の、

釣臺の移柳は、玉關より之れ望む可きに非ず。華亭の鶴唳は、豈に河橋より之れ聞く可けんや。

釣臺移柳、非玉關之可望。華亭鶴唳、豈河橋之可聞。

を踏まえよう(『詳註』所收)。北土に留め置かれた庾信には、身近に親しんだ自然・國土が懐しく回顧されるのだつた。「華亭の鶴唳」は陸機の望郷表現として有名なものであり説明不要だが、「釣臺の移柳」の方は本來望郷心とは無關係な話である。即ち、倪瓚注によれば、晉・陶侃が釣臺のある武昌を治めていた時、部下の夏施なる人物が武昌郡の西門に植えてあつた柳を盗み自分の門に移していたが、陶侃がそれと気づき人々よりその明察を稱賛されたという故事(『晉陽秋』所

收)を指す。ではなぜこの「釣臺の移柳」が望郷心と結びつくのだからか。それは倪注にもあるが、庾信がかつて郢州(武昌)別駕を勤めたことがあり、その折水戦を論じ梁の武帝の稱賛を得たという、郢州時代の、廣い意味における江南時代の華やかな思い出が重なるからにはかならない。つまり「釣臺」の地は、梁朝期の若き庾信の榮光の地の象徴なのである。かくして「釣臺の移柳」は、庾信により初めて「華亭の鶴唳」と等しく、故國における日々を懐かしむ望郷表現となつたと考えられる。杜甫はこれより個別的な語の「釣臺」を落とし、「移柳」のみで故郷との關連を一般化し、「己の生まれ育つた遠い故園」への深い郷愁を托すのである。

では、最後の例を見てみよう。

王子思歸日 王子 歸るを思うの日

長安已亂兵 長安 已に兵亂る(送李卿歸)

「王子思歸」の原話は、『史記』春申君列傳の、楚の王子完が人質として秦にあつた時、楚王の病を理由に歸國を望むがかなわず、「咸陽の一布衣」に終る所を、春申君の働きで無事歸りのち楚王となるといふ故事である。杜甫の詩句はこの話を新しい視點で表現した「哀江南賦」の、

沉んや復た零落し將に盡き、靈光の巋然たるにおいてをや。……咸陽の布衣は、獨り歸りを思うの王子のみに非ず。

況復零落將盡、靈光巋然。……咸陽布衣、非獨思歸王子。

に基づこう。原話との相違を検討してみると、『史記』では楚國が生き残るための戦略として、太子完が春申君とともに秦の人質となつたのであり、また父王の病いの故に歸るを願うのであり、何よりも亡國後の事態ではない。これに對し庾信では亡國後の狀況をいい、多くの

江南人が強制的に敵國に連行されたのであり、彼等が次々に異境に没して行く中で、庾信の強い郷愁の情が表明されているのである。杜詩の場合も、唐室の王孫李暉が吐蕃の侵略から祖國を守るべく、長安への歸還を願うのであり、政治的混亂の下で異郷にある王子達の都への深い愛情を示している。ここで重要なことは、王子の「思歸」を通して、悲惨な運命を強いられるすべての人々の深い悲しみを象徴的に描く藝術性において、庾信と杜甫が同一線上にある点であろう。このように庾信の新しい視點による望郷表現の創出を活かしながら、杜甫は自己の詩の内容を豊かなものにし得ていると思われるのである。

以上の望郷詩を通覽してみると、杜詩と「庾信の」暮年の詩賦（詠懷古跡五首 其一）とが密接に關連することに氣づかされる。そこで今、その背景や特徴などについて考えてみたい。庾信後年の作品の創作において作者を突き動かしているのは、人間社會の矛盾する現實に觸れたことで、心の奥に甦つてきた普遍的な倫理・秩序への模索と、それを突きつけられても現實には何もなし得ず眞摯に懊惱する、弱者的立場の庾信の良心ではないかと思う。貴族の高みから現實の泥沼に足を踏み入れ、實體としての人間・社會を初めて覗いた庾信は、心身を衰殘させるほどのおのきや苦惱に襲われ天をも疑うに至るが、胸中の混亂の總體を文學の創造へと向けることで、内面の嵐を懸命にしのいでいたといえよう。その創作態度は、藝術の價值基準や表現様式の固定的だつた當時にあつては極めて稀な程個性的で人間味を有し、またあまり思辯的な觀念を持ち込まず、現實の體驗に基づいた感想を主體に、政治・社會・自然といった大きな連關の下で自己の文學を形成して行つた點でも、新しい時代へ向けての文學的胎動として位置づけられよう。庾信の後年の作品を内容的に見れば、江南への懐かしい

成都期の杜詩と庾信文學

追憶のみならず、羈旅の愁思・君王と友人への思い・梁朝統治者の腐敗への憤懣・人民の被つた塗炭の苦しみへの同情等まことに豊富多彩なものになつてゐる。杜甫の有名な評句、「庾信文章老いて更に成り凌雲の健筆意縱橫」は、まさにこうした庾信文學の最も本質的な核心部を指摘するものであろう。從來この評句を解釋するに際し、庾信文學自體への視點を輕視して、杜甫自身の比況のみを強調する見方があつたが、それは重大な片手落ちの論だといわねばならない。また杜甫は、「庾信の」暮年の詩賦は江漢を動かした。己は「豈に文章の海内を驚かすこと有らんや」(有客)だと。このような高い庾信評價は、おのづと文學史上における庾信文學の意義を深く認識させ、その繼承と發展に意欲を燃やさせることになつた。杜甫の望郷詩もその一つの現われにすぎないのである。

四

成都期の庾信受容で、もう一つ見のがせないのが五絶の開拓への影響である。

歸雁

東來千里客	東來	千里の客
亂定幾年歸	亂定まり	幾年にか歸る
腸斷江城雁	腸は斷ゆ	江城の雁の
高高正北飛	高高として正に北に飛ぶに	

ほとんど典故らしい典故のない平易な短詩である。これは詩の全體にわたり、庾信の次の二首の五言絶句體詩に酷似する。

(A)和侃法師三絶 其二

客遊經歲月 客遊び 歲月を經

羈旅故情多 羈旅 故情多し
 近學衡陽雁 近ごろ學ぶ 衡陽の雁
 秋分俱渡河 秋分 俱に河を渡らんことを
 (B)重別周尙書二首 其一
 陽關萬里道 陽關 萬里の道
 不見一人歸 見ず 一人の歸るを
 惟有河邊雁 惟だ有り 河邊の雁の
 秋來南向飛 秋來 南に向かいて飛ぶ
 兩者の共通點を圖示すると、

庾 信	(B)	萬里・道	河邊・雁	南向・飛	歸・飛
	(A)		衡陽・雁		
杜 甫		千里・客	江城・雁	正北・飛	歸・飛
		幾年			
		歲月			
			場所+雁	方角+飛	脚 韻
			時間		
			距離+()		

各句の句法・語彙・脚韻・五絶の形式等、ほぼそのままを踏襲しており、また内容的にもとに遠い異境より故郷に歸る雁に思いを托したもので、一見していずれの作品かを見分けることは難かしい。このような内容・形式の全般にわたつて模倣化が行われたのは、かの習作期(杜甫三十才)の五律「已上人茅齋」の對句が庾信の「奉和趙王途中五韻」にそつくり學んだ時と同様であり、一面で共通する状況もあると思われる。

庾信の詩と見まごうような作品が作られた一般的な理由として、すぐ思い當たるのは、杜甫の五絶が成都期以前にはなく、ちょうどこの頃より五絶の開拓が始まり庾信の作品がその手本とされたと思われるこ

と、また五絶が近體詩の最短詩形であるために制約が多く類似表現に固まつてしまつたこと等である。(習作の段階における創作上の手本と、近體詩の形式上の制約という點では、前例の五律の場合と共通する。)しかしそれよりも重要なことは、杜甫がこれらの五言絶句體詩に新しい價値と趣向を鋭く看取し、心を奪われ魅了されたのではないかということである。即ち、庾信文學の特徴といへば普通博識な典故が指摘されるが、全く反對に素朴かつ平易な言語のみによる作品も存するのであり、しかも短い詩中に複雑な「鄉關の思い」を凝縮的に盛り込み、密度の濃い小品抒情詩に結晶化している。これまた豊かな文學的天分が新しい分野に意欲的な開墾を行つたものであろう。杜甫はこれらの作品に思いがけぬ庾信の別の一面を發見し、深く興をそそられたのに違いない。その眞髓を會得するには、まず同化より始めるに如くはない。かくして「歸雁」詩が生まれたということではなかつたか。庾信の抒情五言絶句體詩が唐詩に發展的に繼承されたことはすでにその一端が報告されているが、杜甫の「歸雁」はその濃密な影響を最も直接的かつ典型的に示した作品だといえよう。

思うに五絶の成否は、單純化と象徴化をいかに巧みに成就するかにかかつていよう。杜甫が庾信の五言絶句體詩に學んだのは正にこの點であつたと思われる。その最もよい例が、杜甫の代表作「絶句二首」其二、

江碧鳥逾白 江碧に 鳥逾いよ白く
 山青花欲燃 山青く 花燃えんと欲す
 今春看又過 今春 看すみす又過ぐ
 何日是歸年 何の日ぞ 是れ歸年ならん
 第一二句の「江——鳥」「山——花」の點綴は、庾信「奉和趙王隱士」

詩の、「野鳥繁弦のごとく嘯り 山花焰火のごとく然ゆ」(野鳥繁弦嘯
山花焰火然『詳註』所收)、また「詠畫屏風詩」其二十四の、「水流澗
に平らかに下り 山花谷に満ちて開く」(水流平澗下 山花滿谷開)表現
に類する。ここで庾信は「山花」の對として「野鳥」「水流」を配し、
各々の自然の横溢する様を歌い、對句による相乗効果もあるが、盛ん
な春景の全體を巧みに描寫している。杜甫の「絶句」はこれらの詩想
を借りつつ、加えて庾信の五言絶句體詩の新しい趣向を大膽に展開す
る。即ち、まず眼前の春景を大まかに水邊の「江——鳥——陸上の「山
——花」の關連で代表させ、次にその内部に大自然の秩序ある循環、
また逞しい復原力の脈動を感得する。杜甫はそれを表立つては言わ
ず、ただ各々を最もよく象徴しうる色彩のみを順に賦與して行く。色
彩でもその發現體をよく觀察すればただの色ではない。抽象的な時間
の推移が、可視的な色彩として現われているのであり、たとえば冬か
ら春への移行期だとその鮮やかさをひときわ目立たせる。杜甫はその
些細な變化に、自己の最も歌わんとすることの全體があることを鋭敏
に理解し、他の表現を捨ててしまふ。それは單純化を強く意識した結
果であり、同時に深く純化された叙情を掬い取り、高い象徴性を創出
せんとする成句である。五絶は作る側にとつては、非常な熟練を要求
される難しい詩形であるが、杜甫は庾信に學びつつその特色である單
純化と象徴化を十分に認識しながら、それを一層突き進めることに、
この詩形の一つの可能性を見い出すに至つたのだと考えられる。

五

故郷以外の地としては異例のあしかけ五年も住んだ成都だつたが、
結局この地も「樂土」たりうることはできなかつた。杜甫は蜀を去り

新たな「樂土」を尋ねんとする。

蓬萊如可到 蓬萊 如し到るべくんば

衰白問群仙 衰白なるも群仙を問わん(蓬子)

この「蓬萊如可到」は、「哀江南賦」序に、

星漢様に乘じて上るべきに非ず、風颺道阻てられ、蓬萊到るべきの
期無し。

星漢非乘槎可上、風颺道阻、蓬萊無可到之期。

とあるに基つて(『詳註』所收)。庾信は「蓬萊」に失望し、杜甫はそ
れを求めんという。第一章で見たように、草堂の造營にはあれだけの
情熱を注いだ杜甫だが、今それを捨て新しい地に赴かんとするのは何
故だろうか。一般的にはパトロン嚴武の死や、蜀も戦亂の地と化した
こと等が上げられているが、本質的な所で草堂の生活への一應の飽和
感と、また一方では依然として理想世界への強い飢餓感があつたので
はないか。いわば未解決の問題に心の晴れぬ思いを如何ともし得なかつた
のであろう。それを解決してくれるのは永遠の「樂土」しかない。
しかし現状では身邊の世界には得られぬが故に、ついに非日常的な
「蓬萊」に求めんとしたのだと考えられる。ここで注意すべきは杜甫
の「蓬萊」は地上における理想世界の追求の延長線に把えられている
のであり、單なる神仙境とは異なるという點である。

故郷喪失の状態にある者が、異境から異境へと心懸かれて行くのは
決して矛盾することではない。異境にあつてこそ、彼にとつての最も
美わしき故郷が發現してくるからである。故郷とは人間の最も根源的
な部分であり、ために故郷から遠く隔てられた者は、止みがたい望郷
心の中で何らかの形で「故郷」を自己の内に現わさずにおれない。庾
信や杜甫の場合それは美しい故郷の像となり、ひいては永遠なる理想

郷の世界としても現われてくる。庾信の度々言う「桃花源」はまさにこれであろう。庾信にとつて現在の深い混沌を突き破り、その先に理想を追求することなど考えられだにしかかつたろう。理想郷は過去の榮光の世界の中にこそ確實にあるものだったからである。したがつて庾信は理想郷＝「故郷」を必死に繋ぎとめようとする餘りに、それ以外の可能性にまで心が及ばず、また非現實的な「蓬萊」にも失望し、最後まで「故郷——異境」の間に深い苦惱を刻むことになる。しかし杜甫の場合には、成都期のもう一つの庾信評句に、「庾信は哀しむこと久しと雖も、周顒は（佛教を）好みて忘れず」とあるように、庾信の悲哀を佛教思想により乗り越え、自己の生を過去の安定にではなく、現在の混沌にそのまま委ね、絶えざる不安と同居するのも敢て拒否しないという態度を示す。そうすることで杜甫は人間の能力・努力への限らない信頼を呼びさまし、新しい世界再生への道を開こうとするかと思われる。即ち、現在の深い混沌を凝視し、そこから新しい秩序に必要な何物かを詩という形で表象し、それを理想社會の回復に繋いで行こうとするのである。この點において、杜甫は庾信の解決し得なかつた問題を大きく前進させたといひ得よう。

結

以上、成都期の杜詩と庾信文學との關連をめぐり、幾つかの問題を論じてきたが、最後に全體を通して庾信文學の特質を探つてみたい。庾信は自己の魂の平安には、望まぬ地位や名聲など何の意味もなく、結局己の愛する世界への歸還しかないとを繰り返す。私は庾信の文學は、本質的には人間のごく平凡な、しかしかげがえのない幸福への思慕を底に、「故國喪失」感や「郷關の思い」等を様々に絡みあわせ

つ、切々と歌つた文學だと考える。それは方向からいつて人間の崇高さよりも弱さ・凡愚さの告白を伴わずにはおかないため、この種の文學は時代背景を忘れると評價されにくくなる。多分にそういう面もあつて、後世の人々は庾信文學の可能性を十分に理解できず「強點」したのではないか。中でその眞價を認め得たのは杜甫のみであつた。庾信の文學には高名な宮廷詩人としての誇りと同時に、平凡な一人間としての感懐が矛盾葛藤のままに映し出されている。しかし人間のヒューマンな感情は、平凡な日常の足元への十分な觀察があつて、初めて深くなるものだろう。その意味で庾信文學は成都期の杜詩の抒情性を深化させる上で多大の影響を與え、また夔州期の憂愁の詩の創出にも重要な基礎を形成せしめることになつたといえる。

小論では杜詩と庾信の關連を中心に論じたが、杜詩が庾信とのみ關わつていたわけでは無論ない。庾信と他の詩人との比重については今後の課題としたい。不備な點が多いことかと思われる。大方の御叱正をお願い致したい。

註(1) 陳昌渠「焉得思如陶謝手」(『草堂』81——創刊號、杜甫研究學會編)、徐有富「杜甫學習陶詩風格問題」(『草堂』83——一期)等。

(2) 拙稿(i)「杜甫における庾信——その受容と發展——(安史の亂以前)」(集刊東洋學48・82)、(ii)「同(安史の亂と秦州期)」(愛媛大學教育學部紀要Ⅱ——15・83)を参照。

(3) テキストは、清・仇兆鰲『杜詩詳註』、清・倪璠注『庾子山集注』(許逸民校點、中華書局、80)を用いた。

(4) 拙稿(i)の25・26頁を参照。

(5) 拙稿(i)の24頁を参照。

(6) 矢島徹輔「庾信の絶句體詩における文學意識の轉換」(文學研究 65 九州大學 68)

(7) 沼口勝「庾信の詩と「桃花源」」(漢文學會會報 28 69)

附記：本稿を成すに際し、石川忠久先生の御指導を賜わった。記して厚く感
致謝したい。